

# 「経 験」と 信 仰

森有正における日本人とキリスト教の受容

多 井 一 雄

渡仏以前に書かれた「日本文化とキリスト教の使命」<sup>(1)</sup>の中で、森有正は「日本におけるキリスト教の使命は、日本の社会の中に真のキリスト教を生み出すことである。」と述べている。真のキリスト教とは聖書自身が教えようとしているキリスト教、イエス・キリストの啓示にのみ基づくキリスト教である。キリスト教をこのように理解した場合にも、キリスト教と、日本人あるいは日本文化との結びつきは様々なかたちで可能であるが、両者が最も深い次元において結びつくためには、キリスト教が日本人の意識の根底にまで浸透して、日本や人間を新たに把握し直す試みがなされるような主體的な関係が出来あがらなければならない。「日本文化とキリスト教」<sup>(2)</sup>の論述にしたがえば、仏教、儒教、日本古来の神道と、日本との間に主體的な関係が成立するまで数百年を要したように、キリスト教が日本の精神生活の基盤に根をおろすた

めには、なお長い年月を必要とするのである。

森有正によれば、日本人とキリスト教受容の根本問題は、日本人によるキリスト教の把握の深化と純化の方法に関する問題である。聖書自身が教えようとしているキリスト教、伝統的・正統的キリスト教を、長期的な視野にたつて日本人がどのようにして、その内実の深みにおいて、また純粋なかたちで把握し続けてゆくことができるのかという問題である。

この問題を考える場合にも、森有正は「経験」という概念を手懸りにしている。我々日本人は明治以後、西欧文明を受容し続けてきたが、その結果として我々日本人の精神そのものは、西欧の「経験」と思想とによって内面から浸透されており、それを認めるところから出発する以外にいかなる反省も事実上不可能なのである。<sup>(3)</sup>我々が西欧文明を内的に理解するためには、西欧文明を生

みだした人間の真摯な営みの根底にある「経験」の道を自分で同じように辿ってみなければならぬのである。

森有正によると、「経験」とは、感覚の堆積が経験を生み、経験が思想に結実し、ついに人間の普通の相を定義するまでに至る過程である。経験の出発点、経験の内実としての感覚とは、名辭、命題、あるいは観念を介さないものの直接的な把握のことである。この感覚が純化し、それが限りなく深まってゆき、そこにもののかたがたが露われてくる。そしてついにそれは一つという言葉を加冠するまでの経験になる。これは定義(命名)と呼ばれ、普遍的な共同的な言葉の世界と純粹に主観的な経験の世界を一つに結びつけるものである。さらにこれが思想の水位にまで高められれば、命題の構造的連鎖にまで変貌するのである。

この経験には幾つかの特徴が認められる。経験にはそれに先立つものとして内的促しがある。内的促しとは、理性、意志、感情のすべてを含む、存在全体の方向づけが各個人の中に自覚されたものである。この内的促しにしたがうことによって、意志、理解、認識、感情が結集して、各個人の中で一つの意味をおびてくる。その総体は自我と名づけられる。各個人は人とは異なった内的促しにしたがひ、人とは異なった多様な感覚と経験を持っている。自分の経験だけが自分であって、経験は一人の人間の生涯に唯一つしかない。このことが経験は一個人、一生涯を定義するということの意味である。それゆえに個人の尊厳、独立などの個人の重

きは、経験そのものの質とその純化の程度によって定義される。また経験はその内実としての感覚の中に自己批判の原理を含んでいる。批判というかたちで、他人を自分と区別し、また自分を自分と対立させることの中で、経験は無限に深められ、変貌してゆく。経験は内的促しにしたがうことであるから、予測不可能な冒險に身を投ずることもある。冒險に身を投ずることによって、人間の中にこれまでになかった何か新しいものが生まれてくるのである。

森有正はこのような特徴を持った西欧的経験と日本人の経験を対立させる。彼は日本人の経験のあり方を二項結合方式(二項関係、二項方式)と名づける。ヨーロッパ的経験は一人称 $\parallel$ 三人称関係である。一人称の自己は他人にとつては、一人称の自己を内側に持つ他人である。その他人も他人自身にとつては一人称の自己である。両者は相互に一人称対三人称であり、それが二人称を介して交渉する。しかし日本人の場合は、すべてが二人称 $\parallel$ 二人称関係(二項結合方式)に移動する。日本人において経験は、一人の個人ではなく、二人の間を構成する関係を定義している。この関係は、すべての人間が内密な関係を経験において構成し、その関係そのものが二人の人間の一人一人を基礎づける結合の仕方である。すなわち自分の一人称が相手によって決定され、相手から独立した、相手に影響されない一人称を持つことができないう結合の仕方である。このような日本人の経験には、親密性と関係

の方向の垂直性という二つの特徴がある。

親密性とは、日本人の経験においては、一つの経験の本質的な部分に他人が参与してくるということである。二項結合方式に入つた自他は、互いに相手に対して秘密のない関係を構成する。そこにおいて人間的に未知なるものは可能な限り消去されるのである。それゆえに日本人の経験の中には、異質なものに對して自己を閉ざす傾向があり、外部から入ってきたものを経験の根底にまで掘り下げて思索することをせず、むしろ新しいものを自己の体験で理解できるものに変化させてしまうのである。関係の方向の垂直性とは、この関係が対等な関係ではなく、上下的、垂直的、命令と服従に基づく関係であるということである。この関係の中では各自はある意味で相手を知り尽しており、相手が何を望み、何を望まないかをあらかじめ了解し、それに応じて自分の態度を相手が望むように変化させるのである。

このような日本人の経験のあり方の中では人間は孤独になることができず、キリスト教の把握の深化と純化の前提である個人、責任ある主体性の確立が妨げられる。また経験の深化もおこらないために、キリスト教がその深い内実において受容されず、キリスト教が体験主義や観念論になったり、日本的なものに同化してしまう。また西欧の経験が確立していないために、日本における人間関係も、キリスト教の受容によって神の前における平等な人間関係が形成されるよりも、神と人間との間の上下関係が人間関

係に投影され、上下関係が強化される。

キリスト教の把握の深化と純化を妨げているものは、日本人の経験の構造それ自体である。これを克服するためには、日本人の経験とは異質の経験、すなわち西欧の経験の道を辿ることによって、一人称<sup>II</sup>三人称関係を確立する他はない。キリスト教が西欧文明の中でのみ根をおろし得たのは、キリスト教が西欧的経験の中で撰取されたからである。

しかし経験と信仰はいかなる関連性を持つのであろうか。西欧的経験を基盤としてのみ、信仰の深化と純化が生じるということは、信仰が経験と連続している、あるいは信仰が経験に依存しているということではない。信仰はまったく経験の外にあり、経験から信仰に至ることはできない。経験に属するものの中で信仰を教えてくれるものは何もない。それは人間の側からいえば、信仰という意志の働きが一切の理由づけを不可能にする深い根源性から発しているということであり、神学的にいえば、信仰が神の不可抗的な恩寵に依存しているということである。しかし信仰も経験においておこるのであるから、経験を越え、経験とは無関係なものが、経験の中でおこるものがキリスト教であるといえる。

信仰と経験は相互に自立、独立しているが、これらは一人の人間の中では一つの統一された経験を構成している以上、これまで述べたような感覚的経験が信仰の経験を深化し、純化する可能性と共に、信仰の経験が感覚的経験を深化し、純化する可能性も考

えられないであろうか。森有正はこのような可能性を肯定している。信仰によって神だけを唯一の汝として呼び求めるとき、それに対する責任として真の実存、個人が形成されてゆくのである。

そのときすべてのものが第三者になり、神と人間との間に一人称(8) 三人称関係が確立されてゆく。また森有正はアブラハムの信仰を語ることによって、信仰の経験の様々な特徴をあげている。信仰の経験は神と隣人に直接触れさせる直接性という性格を持ち、内的促しに駆り立てられた歩みであり、服従の道である。信仰の経験は冒険という性格を持ち、その中で真の自由が実現される。信仰の経験の歩みは、一個人、一人の生涯を他人と置き換えることのできないものにする。このような信仰の経験の特徴は、感覚的経験の特徴でもあった。このように信仰の経験と感覚的経験は類比的に考えられているので、両者の間に相互作用があり、信仰の経験が感覚的経験を深化し、純化する可能性も考えられているように思われる。

最後に強調されなければならないことは、キリスト教の把握の深化と純化のためには、信仰の経験それ自身が深められなければならないということである。森有正は哲学者としての立場を守って、このことについてはなるべく語らないようにしている。人間に経験の外にある世界を知らせる唯一の手懸りは罪である。人間は罪を赦され、初めて経験の外にある存在に触れ始める。信仰の経験を深める具体的な道は、罪をその最も深い現実性において定

義し直すことである。罪が神からの離反であれば、罪の現実を定義すれば、神や神の恩寵をその深い現実性において定義し直すことにもなるのである。(9)

しかしキリスト教の把握の深化と純化は、日本人の経験をまったく排除するものではない。一個人の経験の中で、日本人の経験もその他の経験と共に一つの秩序を形成するのである。キリスト教は、キリスト教以外の日本人の宗教体験に対しても必ずしも審判的ではなく、むしろそれを暖め、育てるものである。(10)

- (1) 森有正全集 6
- (2) セーヌの辺で (現代の視界 5 森有正) 毎日新聞社
- (3) 森有正全集 12 - 経験と思想 -
- (4) " "
- (5) " "
- (6) 森有正全集 1 - 流れのほとりにて -
- (7) 現代のアレオパゴス (日本基督教団出版局)
- (8) アブラハムの生涯 (森有正講演集) (日本基督教団出版局)
- (9) 現代のアレオパゴス (日本基督教団出版局)
- (10) 古いものと新しいもの (森有正講演集) (日本基督教団出版局)

― 現代における信仰の意義 ―  
土の器に (日本基督教団出版局) ― 日本人の心、神の知恵と知識との富 ―

(たい・かずお、倫理学、武蔵工業大学専任講師)